

農業經濟研究 別冊

1999年度

日本農業經濟学会論文集

*PROCEEDINGS OF ANNUAL CONFERENCE OF
THE AGRICULTURAL ECONOMICS SOCIETY OF JAPAN*

1999

日本農業經濟学会

「関税化」におけるコメ輸入のメカニズム

伊東正一

(鳥取大学農学部)

Rice-Tariffication of Japan: Possibility of Rice Imports
(Shoichi Ito)

1. はじめに

日本政府は1999年4月からコメの輸入に関し「関税化」を実施した。日本へのコメ輸出を希望している国は多い。中でも中国、アメリカ、オーストラリア、南米（ブラジル、ウルグアイ、アルゼンチン）は特に日本のコメ輸入拡大を望んでいる。これらの地方では日本産品種米の研究、生産が盛んに行われており、地理的にもジャポニカ米生産の適地となっている〔1〕〔5〕〔6〕。また、世界のコメ貿易も近年においては急増しており、各輸出国の競争も激しさを増している〔4〕〔9〕。

本稿では日本のコメ関税化についてそのメカニズム分析を試みるとともに将来のコメ輸入の見通しについて推察する。

2. 「関税化」の制度

1) 「関税化」の概要

「関税化」とはこれまで数量的に制限があったものを改め、輸入米に対し高い関税をかけ、その代わりに数量制限を取り外すというものである。1995年度から1998年度まではいわゆるミニマム・アクセス米(MA米)として、1986年から88年の実体を基準にした日本の消費量の4%（約40万トン）を1995年に輸入し、2000年までに8%（80万トン）にまで毎年の輸入量を0.8%ずつ拡大するというものであった。これを1999年度から「関税化」に切り替えることにより、MA米の輸入量の毎年の増加率はこれまでの0.8%ではなく0.4%となり、義務的に輸入しなければならないコメ輸入の増加量は半減する、というシナリオとなる。（本稿では計算をやりやすくするために基準年となる1986年から1988年までの平均消費量を1,000万トンとして話を進めることにする。実際の数量は食糧庁のデータによると玄米換算で約1,068万トンになっている。）

つまり、MA米としての輸入量は2000年度でみると、当初の80万トンが72万トンに押さえられるということになる。しかし、その代わり、関税を払って輸入されるコメ（本稿では「関税米」と呼ぶことにする）には量的な制限がない。関税の額は1999年度が1kg当たり351.17円である。この関税額は1986年から88年を基準に政府が試算した輸入米と国内産米との差額1kg当たり「402円」に対し毎年2.5%（1kg当たり約10円）ずつ減少し、2000年には341円になることになっている。また、仮に関税米の輸入量が急増し、当年の関税米が過去3年間の平均総輸入量の25%から国内消費量の減少分を差し引いた量を上回るようになった場合はセーフガードを発動し関税額の3分の1を新たに課税することができる制度が用意されている〔7〕。この制度も2001年以降のことについては2000年に新たに交渉されることになっている。（セーフガードの発動は輸入価格が基準年（1986年～1988年）の価格を10%以上下回った際にも実施されることがある。ただ、この基準年の価格は史上まれにみる低迷した時期であった。）

2) グラフィカル・アプローチによる「関税化」構造の分析

第1図はある農産物の輸入大国がクォータ制から「関税化」に移行し、関税率も一定して引き下げた場合を分析したものである〔10〕。まず、関税の高いときには輸入量はクォータ制の時と全く変わらない q_{MA} であるが、ED-1sg'さらにはED-1sg''へと毎年の関税切り下げが進むに従ってミニマム

そうして、関税を 1kg 当たり 351.17 円の従量税を一律にかけるとどうなるかを試算した。そ

第 1 表. 関税を 1kg 当たり 351.17 円かけた場合の輸入米の状況
(精米 10kg 当たり)

	ア州産コシ	加州産キャル	黒産合江19
海外			
(1) FOB価格	\$6.90	\$4.82	\$3.13
(2) 海上輸送費	\$0.70	\$0.50	\$0.30
(3) 海上保険料 $[(1)+(2)] \times 0.006$	\$0.05	\$0.03	\$0.02
(4) 金利 $[(1)+(2)+(3)] \times 0.012$	\$0.09	\$0.06	\$0.04
(5) 輸入業者手数料 $[(1)+(2)+(3)] \times 0.03$	\$0.23	\$0.16	\$0.10
(6-1) CIF価格(日本) $[(1)+(2)+(3)+(4)+(5)]$	\$7.97	\$5.58	\$3.59
(6-2) 円建てCIF価格(為替レート、115円/ドル)	¥916	¥641	¥413
(7-1) 関税, 351.17円/kg	¥3,511.7	¥3,511.7	¥3,511.7
(7-2) 351.17円/kgを従価税に換算した場合の関税率	383%	548%	851%
国内			
(8) 通関手数料 (7,000円/トン)	¥70	¥70	¥70
(9) 倉庫保管料 (600円/トン/10日 x 20日)	¥12	¥12	¥12
(10) 倉庫渡し価格 $[(6-2)+(7-1)+(8)+(9)]$	¥4,510	¥4,235	¥4,007
(11) 国内販売手数料 (750円/10kg)	¥750	¥750	¥750
(12) 小売価格 $[(10)+(11)]$	¥5,260	¥4,985	¥4,757
(13) 評価価格	¥4,564	¥3,354	¥4,122
(14) 消費者のメリット $[(13)-(12)]$	¥-696	¥-1,631	¥-635

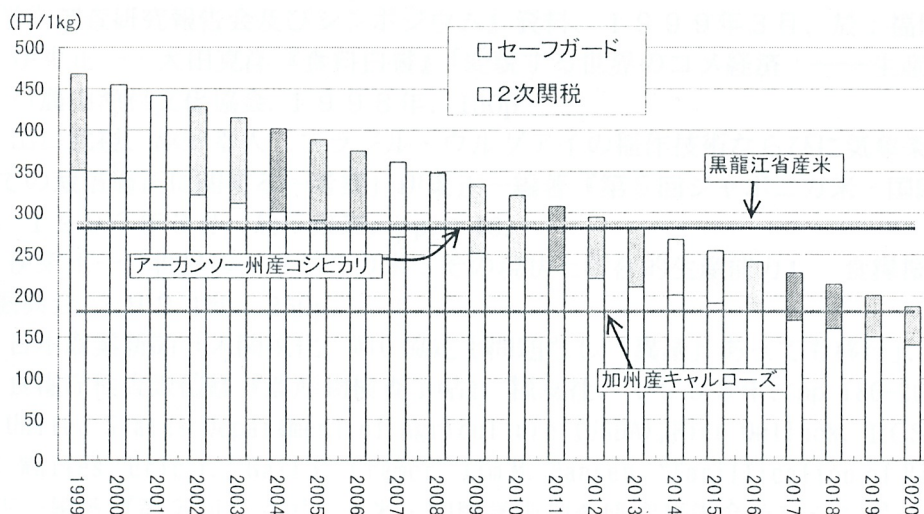
注) 外国産米の評価価格は伊東正一著『世界のジャポニカ米、その現状と生産能力』食糧振興会叢書 No. 43, 1994年, p.164を参考にした。なお、評価価格は当時の価格に対し、日本国内の市場価格が値下がりしていることを考慮し、2割引とした。

れによると小売り価格はア州産コシ、加州産キャル、そして黒龍江省産米がそれぞれ 5,260 円, 4,985 円, 4,757 円となり、試食に基づく評価価格と比べた消費者のメリットはそれぞれ -696 円, -1,631 円, -635 円となる(表1の(12)、(13)及び(14)の段を参照)。加州産キャルローズのように品質の劣るコメほど不利になる。ただ、これらの従量税を従価税に換算してみるとア州産コシ、加州産キャル、そして黒龍江省産米の場合がそれぞれ 383%, 548%, 851%と試算される(表1の(7-2)

の段を参照)。これは同じ米国产のコシヒカリとキャルローズでは高品質のコシヒカリに対する関税率が低くなっている。しかし、同時に中国産の高品質米の 851%にみられるように、コストの低い産出国に対しては不利になる。1990年代初めのウルグアイ・ラウンド交渉の際には日本の「700%関税説」が流れていたが、それに比べると生産コストの高いアメリカ産米に対する今回の課税額は低くなっていると解釈することができる。

2) 「関税化」における輸入の可能性

さて、それでは外国産米は「関税化」の下で、いつ頃から日本に輸入されるようになるのだろうか。関税が毎年 2.5%ずつ切り下げられると、これは 10kg あたり毎年 100 円ずつ下がることになる。とすると上述した消費者のメリットのマイナス(表1の(14)の段)がプラスに転じる



第 2 図 「関税化」における輸入の可能性(下げ幅が年2.5%の場合)

るのはア州産米で 7 年後、中国産では 6 年余り後ということになる。つまり 7 年後の紀元 2006 年には中国やアメリカの良質米は「関税化」の下で輸入されるようになる可能性がある(第 2 図)。また、輸入が急増する場合は新たに 3 分の 1 を追課税する「セーフガード」

が予定されているが、この場合でも紀元2013年を過ぎるとセーフガードさえ乗り越えた輸入の可能性が出てくる見通しとなる。ただ、品質の劣る加州産キャルローズは紀元2016年を過ぎなければ「関税化」の壁を乗り越えることはできないし、また、セーフガードを乗り越えるのは紀元2020年を過ぎてからになる。また、関税の下げ率が3%で推移する場合はこれより早い時期に関税米の輸入が増えることになる〔3〕。このように外国産米でも高品質のコメは日本国内での評価も高いため、意外に早い時期に関税を乗り越えて日本市場に上陸する可能性がある。

こうしてみると、関税の下げ率が年2.5%で推移した場合、紀元2010年前後から良質米の輸入が急増することが考えられる。このころは海外の生産現場においても良質米の生産が軌道に乗り、生産の拡大、コストの切り下げ、そして産地間の国際競争が華々しく展開されている頃であろう。

4. おわりに

1kg当たり351.17円という高い関税も国内相場により高く見えたりそうでなかったりする。外国産米が輸入されやすい一つの条件は品質に対する評価価格が高いことである。しかし、国内相場が安ければ安いほどこの評価価格も安くなる。そうすると当然のことであるが、国内産の生産コストが下がり販売価格が下がれば下がるほど外国産米は輸入されにくくなる。年2.5%の関税の引き下げは10kg当たり毎年100円ずつ輸入米の価格は下がることを意味している。とすれば、国内産米もこの値下げのスピードに付いていかなければならないことになる。これに一步先んじれば関税米の輸入は抑えられるし、遅れれば輸入量は増えるということになる。

(本研究は文部省の科学研究費・基盤研究A(2)「世界におけるジャポニカ米の生産・流通と潜在的生産能力に関する学際研究——その2」(代表 伊東正一)による研究成果の一部である。

引用文献

- 〔1〕 Ito, Shoichi, E. Wesley F. Peterson, Bharat Mainali and Mark W. Rosegrant, "Estimates for Evolution of U.S. Rice Supply Response Using Implicit Revenue Functions: Implications to the World Food Supply and Trade," *Japanese Journal of Rural Economics*, Vol.1, 1999, pp.39-51.
- 〔2〕 伊東正一、林賢太郎「コメの関税化にみる「従価税」と「従量税」の違い」伊東正一編著『第7回ジャポニカ米・国際学術調査研究報告会及びシンポジウム』資料、1999年3月、於：福岡、pp. 17-23.
- 〔3〕 伊東正一「日本の「関税化」と外国産米輸入の可能性」伊東正一編著『第7回ジャポニカ米・国際学術調査研究報告会及びシンポジウム』資料、1999年3月、於：福岡、pp.1-9.
- 〔4〕 伊東正一・大田克洋『食料白書』「変貌する世界のコメ経済：——生産・消費・流通の最新動向——」農山漁村文化協会、1998年、150p.
- 〔5〕 山口武視、津野幸人「ブラジル・ウルグアイの稲作技術ならびに気象条件からみた日本品種の両国での栽培適正に関する一考察」伊東正一編著『第5回ジャポニカ米・国際学術調査研究報告会』資料、1997年3月、於：東京、pp. 5-16.
- 〔6〕 伊東正一『世界のジャポニカ米：その現状と潜在的生産能力』食糧振興会叢書43号、全国食糧振興会、1994年、250p.
- 〔7〕 日本農業新聞「米関税化 WTO協定上問題なし「異議」あっても移行」、1999年2月3日号
- 〔8〕 食糧庁検査課監修『農産物検査手帖』、糧友社、1998年、pp.186-203
- 〔9〕 United States Department of Agriculture (USDA), Rice Outlook, RCS-0799, July 12, 1999.
- 〔10〕 Wailes, Eric J., Gail L. Cramer, Jim M. Hansen, "Tariffication of Rice Imports in Japan," 伊東正一編著『第7回ジャポニカ米・国際学術調査研究報告会及びシンポジウム』資料、1999年3月、於：福岡、pp. 17-23.